

【旧約聖書日課】創世記 12章1～9節

¹主はアブラムに言われた。

「あなたは生まれ故郷

父の家を離れて

わたしが示す地に行きなさい。

²わたしはあなたを大いなる国民にし

あなたを祝福し、あなたの名を高める

祝福の源となるように。

³あなたを祝福する人をわたしは祝福し

あなたを呪う者をわたしは呪う。

地上の氏族はすべて

あなたによって祝福に入る。」

⁴アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。

アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。⁵アブラムは妻のサライ、甥のロトを連れ、蓄えた財産をすべて携え、ハランで加わった人々と共にカナン地方へ向かって出発し、カナン地方に入った。⁶アブラムはその地を通り、シケムの聖所、モレの樫の木まで来た。当時、その地方にはカナン人が住んでいた。

⁷主はアブラムに現れて、言われた。

「あなたの子孫にこの土地を与える。」

アブラムは、彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた。

⁸アブラムは、そこからベテルの東の山へ移り、西にベテル、東にアイを望む所に天幕を張って、そこにも主のために祭壇を築き、主の御名を呼んだ。⁹アブラムは更に旅を続け、ネゲブ地方へ移った。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 4章13～25節

¹³神はアブラハムやその子孫に世界を受け継がせることを約束されたが、その約束は、律法に基づいてではなく、信仰による義に基づいてなされたのです。¹⁴律法に頼る者が世界を受け継ぐのであれば、信仰はもはや無意味であり、約束は廃止されたこととなります。

¹⁵実に、律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反ありません。¹⁶従って、信仰によってこそ世界を受け継ぐ者となるのです。恵みによって、アブラハムのすべての子孫、つまり、単に律法に頼る者だけでなく、彼の信仰に従う者も、確実に約束にあずかれるのです。彼はわたしたちすべての父です。¹⁷「わたしはあなたを多くの民の父と定めた」と書いてあるとおりです。死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる神を、アブラハムは信じ、その御前でわたしたちの父となったのです。¹⁸彼は希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じ、「あなたの子孫はこうになる」と言われていたとおりに、多くの民の父となりました。¹⁹そのころ彼は、およそ百歳になっていて、既に自分の体が衰えており、そして妻サラの体も子を宿せないこと知りながらも、その信仰が弱まりはしませんでした。²⁰彼は不信仰に陥って神の約束を疑うようなことはなく、むしろ信仰によって強められ、神を賛美しました。²¹神は約束したことを実現させる力も、お持ちの方だと、確信していたのです。²²だからまた、それが彼の義と認められたわけです。²³しかし、「それが彼の義と認められた」という言葉は、アブラハムのためだけに記されているのではなく、²⁴わたしたちのためにも記されているのです。わ

た私たちの主イエスを死者の中から復活させた方を信じれば、わたしたちも義と認められます。²⁵イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 8章51～59節

⁵¹はっきり言っておく。わたしの言葉を守るなら、その人は決して死ぬことがない。」⁵²ユダヤ人たちは言った。「あなたが悪霊に取りつかれていることが、今はっきりした。アブラハムは死んだし、預言者たちも死んだ。ところが、あなたは、『わたしの言葉を守るなら、その人は決して死を味わうことがない』と言う。⁵³わたしたちの父アブラハムよりも、あなたは偉大なのか。彼は死んだではないか。預言者たちも死んだ。いったい、あなたは自分を何者だと思っているのか。」⁵⁴イエスはお答えになった。「わたしが自分自身のために栄光を求めようとしているのであれば、わたしの栄光はむなしい。わたしに栄光を与えてくださるのはわたしの父であって、あなたたちはこの方について、『我々の神だ』と言っている。⁵⁵あなたたちはその方を知らないが、わたしは知っている。わたしがその方を知らないと言えば、あなたたちと同じくわたしも偽り者になる。しかし、わたしはその方を知っており、その言葉を守っている。⁵⁶あなたたちの父アブラハムは、わたしの目を見るのを楽しみにしていた。そして、それを見て、喜んだのである。」⁵⁷ユダヤ人たちが、「あなたは、まだ五十歳にもならないのに、アブラハムを見たのか」と言うと、⁵⁸イエスは言われた。「はっきり言っておく。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある。』」⁵⁹すると、ユダヤ人たちは、石を取り上げ、イエスに投げつけようとした。しかし、イエスは身を隠して、神殿の境内から出て行かれた。

神のミステリーツアー【こども説教のために】

日曜日の教会へと集められてきたわたしたちは、「アブラハムの旅」に加えられています。元の名を「アブラム」と呼ばれていた「アブラハム」は、75歳で神に「わたしが示す地に行きなさい」と言われて、生まれ故郷の父の家を離れて旅立ちました。それ以来、アブラハムの家族やその子孫たちだけでなく、世界中の多くの人が、「アブラハムの旅」に加わってきたのです。「アブラハム」を旅立たせた神が「行きなさい」とお示しになられるところを目指して行く「旅」です。

わたしたち日曜日に教会に集められる者たちは、その「アブラハムの旅」に、主イエスを通して加えられてきました。主イエスと共に旅をした弟子たちが、その旅を続ける者たちの「教会」を始めてくれたからです。教会は、わたしたちが皆、「アブラハムの旅」を続けることができるように、この旅のガイドをしてくださる主イエスの御言葉に耳を傾け、旅の心得を主イエスから学ぶところです。

アブラハムは、神に「行きなさい」と言われて旅立ちましたが、その行き先がどこか、知りませんでした。「ミステリーツアー」のような旅を始めたアブラハムは、生涯の終わりに目的地に到着しませんでした。けれども、その「旅」を通して、家族と共に、神の祝福に入れていただいたのです。

祝福の約束

教会では、「祝福」という言葉が多用されます。主イエスに従って教会の営みを始めた使徒たちは、「祝福を受け継ぐためにあなたがたは召されたのです」(Iペトロ 3:9)と教えました。礼拝でも、祝福は繰り返し告げられます。それは、神からの祝福でもあり、互いに交わす祝福の祈りでもあるのです。

アブラハムの旅は、「祝福」の約束と共に始められました。主なる神は、アブラハムに対して「祝福」を約束されるだけでなく、アブラハムを祝福する者をも祝福すると、約束されています。互いに祝福を交わす者たちを、神は祝福してくださるというのです。

アブラハムが「旅」を始めたのは、まさにこのためであったのでしょうか。アブラハム一人が祝福されるためであれば、彼は、必ずしも旅を始めなくてもよかったです。慣れた地にとどまり、余生を楽しめばよかったです。けれども、彼は、今得ている安住を離れて旅立つことを促されました。そうしなければ、彼は、互いに祝福を交わすことになる者たちと出会うことができなかつたでしょう。

わたしたちは、その「アブラハムの旅」に加わるように招かれてきました。

わたし自身は、両親が十代からの信者でしたから、物心ついたときには、この「旅」を共にする人たちの中に置かれていました。大人や先輩の振る舞いを見て、この「旅」の心得を無意識のうちに学び、無自覚に身に付けてきました。その一つひとつの良し悪しを、必ずしも自分自身で判断してきたわけではありません。十代の反抗期には、人並みにそれに疑いを持ち、自分自身で納得できるまで抵抗をするということも経験しましたが、この「旅」の群れから離れようとは思いませんでした。むしろ、わたしにとっては、「牧師」になるという決断こそが、本当の意味での「旅立ち」であったかもしれせん。

アブラハムは、75歳でこの旅を始めたと、「創世記」は物語ります。それまで、父の家で神を知らずにいたわけではなかつたのでしょうか。けれども、彼には、その年齢での「旅立ち」が必要だったのです。

わたしたちのそれぞれに必要な「旅立ち」がいつであるのか、わたしたち自身には分かりません。けれども、そのときがあるということは、はっきりと申し上げます。促しがあるのです、その人にしかわからない促しが。それに気づかれたならば、どなたも、「アブラハムの旅」に一步、踏み出していただきたい。

そのときに、早すぎることも、遅すぎることも、ありません。けれども、ふさわしいとき、があるはずです。早まっではいけません、そのときを逃してもいけないのです。

「あなたの子孫はこのようになる」

わたしの父は、15年前に75歳で亡くなりました。亡くなる四カ月前から入院し、最後の一カ月はホスピスに入っていました。入院中、弱っていく父を見て、母が「何でも自分でしてきた人が、幼い子どもみたいになってしまって、何もできないと言う」と呟くことがありました。母としては、それまでの人生の日々のように、父が揺るがない強さを持ったまま最期を迎えてもらいたかったのでしょう。そのように言う母に、わたしは、「アブラハムが75歳で新しい旅を始めたように、今、新しい旅を始めようとしている」と申したことがありました。そう言ったのは、半分は、父がまた回復して元気になることを期待する母を励ますためでしたが、もう半分は、別の理由からでした。わたしには、父が、それまで背負ってきた重荷をようやく降ろして、素のままの自分で新しい旅を始める準備をしているように思えたからです。

主イエスがユダヤ人たちと論争する中で、「あなたは、まだ五十歳にもならないのに、アブラハムを見たのか」と言われていました。四年前に五十歳を迎えたとき、わたしは、「ようやく、アブラハムについて語れる年齢になった」と思いました。実際には、まだ十分に語れないように思えます。まだ「七十五歳」になっていないからです。けれども、「アブラハムの子ら」のことならば、少しは語ることが許されているように思います。

75歳で子のなかったアブラハム夫妻は、その後、90歳近くになって女奴隷ハガルに産ませた子イシュマエルをようやく得、妻サラとの間では100歳になって初めて息子イサクを与えられています。イサクは、アブラハム夫妻がもはや誕生を望むべくもないと心に定めた後に与えられたのです。神が約束くださった子であるということで、「約束の子」と呼ばれてきました。

教会で生まれ育った子どもたちのことを「約束の子」と呼ぶ習慣を持つ人たちがいます。多くの場合、幼児洗礼を授けて、「約束の子」として教会の中で育てられてきたのです。それは、彼らの自由な人生の選択を奪うためではありません。彼らに、神に祝福された「祝福を交し合う者たち」の共に生きる「旅行き」が、何よりも恵みとして与えられたものであることを、親と教会がしっかりと伝えようとしてきたことなのです。

アブラハムを「信仰の父」とする「アブラハムの宗教」の旅を共にする人々が互いに銃を向け合う現実を、突き付けられています。主イエスは、「悪口を言う者に祝福を祈り」（ルカ6:28）なさいと教え、使徒たちは、「悪をもって悪に、侮辱をもって侮辱に報いてはなりません。かえって祝福を祈りなさい」（1ペトロ3:9）と勧めました。わたしたちは、今も、新たに「アブラハムの旅」を始め直すことを、求められています。その一步は、全人類が「あなたによって祝福に入る」ために必要な一步なのです。